

## 移動のリアリズムが容赦ない

古川日出男 作家

## 『家をせおって歩いた』

村上慧 夕書房 2000円

この本の中身のこと、それから著者のことを知るには巻末の著者プロフィールから一部を引用するのがよいと思う。そこにはこうある。「美術家。友人と借りたアトリエの鍵を受け取った日に東日本大震災が発生。2014年4月より発泡スチロール製の家に住む」と。そして、巻末どころか表紙に戻ると、こう書名が刻まれているのが目に入る。「家をせおって歩いた」と。

ちょっとの記録が、ここに本の形にまとめられている。初日の言葉は、こうだ。〈僕はいま二十五歳。もう四半世紀生きています。一世紀なんて、僕が思う以上にあっという間に過ぎ去っていくのだろう〉

実際には「家を」と「せおって」と「歩いた」との間には、ほんの少しの空白が挟まっていて、それが何かを表している。とても雄弁に表現している。評者の私が勝手に想像するに、少しずつの息継ぎではないのか。一歩一歩というリズムではないのか。つまり、歩いている、ということではないのか。

その14日後、背負って移動しているモノについてはこう記述する。〈僕はあれを「家」と呼んでいるけど、その正体は、あの震災のとき、僕を動けなくさせたなにかを具現化したもの。家というよりも、僕が生きていく限り、連れて歩かざるをえない荷物のように思える〉

そうなのだ、この著者は全国を自ら制作した家とともに移動している。とりあえず、その最初の1年間と

進むということは、移動ですら日常化するということだ。すると記述のほぼ全篇が、自己肯定と否定との葛藤、今の社会を問うことに割かれ出す。ブログでリアルタイムに記述

されてきたためか、何しろ、思索に容赦がない。また、移動のリアリズムもかなり容赦がない。今日、どこに家を置くのか？ 敷地は、誰かから（たとえば寺社から、道の駅から）借りられるのか？ 読み進むにつれて、二つのことを感じる。その一つめだが、この本———というかこの活動の記録———はまるで江戸時代の俳諧紀行だ、ということ。当時、俳人たちは全国を行脚して、旅先では宿の主人に挨拶の句を贈ったりして、そうやって移動の記録を残したわけだが、ここでの著者の美術家は、同じように徒歩で行脚して、旅先ではいろんな家の絵を描いて、乞われればその絵のコピーをやったり宿の主人に贈ったりしている。

特に、東北地方を回る序盤、これは現代美術版の「おくのほそ道」だ。つぎに強烈に感じるのは、この本

は読後感よりも、読中感が大切なんじゃないか、ということ。なにしろ著者は、たった一人で足を前に前にと動かして、路上を移動しているものだから、その道中、ずっと考えている。考えて考えて、どんどん結論を出して、と同時に「いや、このテーマには結論を出してはならないのだ」とも真剣に考えて、その真剣さが、やっぱり、結論。じみて映り、そうすると、読みながらこっちは「うん、それはわかるけど、でもさ」とか、「そうなのかなあ……」とか、要するに著者と会話をはじめてしまう。

この本が仮に小説か何かだったら、たぶん起きはしないであろうこと———すなわち、主人公とのディスプレイション———がここではごく自然に起きてしまう。

で、それが不思議なのだ。だって、著者は「一人で、誰もいないところで、歩きながら」考えているわけだ。それなのに、そのひと言ひと言に反応してしまうのは、なぜなのか？

対話のなかった彼の移動（のある一つの側面）に、読者が後からレスポンスの言葉を添える、ということ。つまりここでは、読書とは、同行なのだ。道連れになる、ということ。うん、じつに面白い。



むらかみ・さとし=1988年、東京都生まれ。武蔵野美術大学卒。主な個展に「移住を生活する 1~182」。2016年に第19回岡本太郎現代芸術賞入選。